

あを 1
2005



始祖鳥の數羽は高所恐怖症

喜孝



始祖鳥
夏目明彦

あを

一月作品



始祖鳥の翔びかうてゐるお元日
始祖鳥が木を攀る初日の出
枯雀つぎつぎと出る深轍
深手とはこのくらいかも薬喰
返札のすべてワープロ年果つる
果し状仕様不詳で置炬燵
冬林檎雪のおもさの手にありぬ

綿入の柄に色なし古写真
蒲の根は水中にあり穂絮とぶ
太平洋深層水の新豆腐
年行くや別々にラジオ深夜便
闇汁を深淵のぞくごとくする
竜の玉ポケットふかく汗ばめる
竜の玉ふかきとおもふあはしとも

竜の玉
竹内弘子

始祖鳥
佐藤喜孝

おいらくのまた夢を見む玉子酒
降る雪や三和土にのこる手毬唄
年の酒なみだ出るとき上向いて
手袋に左右ある寒さかな
母の名は雪激しさとはかなさと
寒灯や喪中の家のにぎやかな
年始め九十五歳の葬りとて

秋光燦礼拝堂の絵ガラスに
マリア像買はずに秋の津和野かな
秋の木の根元に影を置いて来し
いわし雲記憶の小骨つき刺さる
集落のあれば墓あり石露の花
ちぎれ雲東へ飛びて嵐寄す
考へる人黄落の大樹背に

マリア像
田中藤穂

母の名は
堀内一郎

列島に悲嘆つぎつぎ後の月
行秋の中越地震破壊力
未枯やモノク口映画浮び消ゆ
町なかに實の残りをる柿紅葉
紅葉あかりうけし一日はづむ
階段を上がりて下りて冬支度
帰路

被災地の少年落葉踏みしめる
剪定に秋空高く澄みわたる
鍵穴の横に斧ふるいぼむしり
鳥騒ぐ刈り残されし蕎麦畑
小春日やかサブランカを土深く

落葉

早崎泰江

長崎桂子

冬椿其角堂まで燭ならぶ

山門に門のなし烏瓜

結界の奥の奥なる柿紅葉

水底に冬日のゆるる鯉の口

秋霖やシルバート誰も居ず

花鋏使はざる日の石路の花

カラクリの小箱楽しむ小六月

古本や暖炉に揺るる馬車の旅

紅葉から紅葉へ雫紅葉散る

白波に寄する白波冬銀河

雪山路林檎を齧る皮のまま

霧を抜け毛糸の帽子輝きぬ

尾根の道親に添ひたる鹿の糞

今日も来しいいよいいよと鶉は啼く

古 本
森 理和

小 六 月
森 山 の り 子

まろびてはとがりては日の枯芒
初秋やおよびの苾にすぎとほる
橋桁にぶつかつてゐる秋の草
こころあふ夜半となりゆく鉦叩
断層の真上の稲架にかけ重る
もう少し居ぬかと考の初時雨
林麓に遠雷吃りどもり来し

旅の身に日曜家族柿を提げ
雨情の居茄子紫の影落す
帽の廂ひに風鳴り初冬老ゆるかな
今朝秋の蜩香に立つ久慈の宿
こほろぎや沖に逆立つ北斗の柄
泪して胃散にむせぶ夜の野分
山茶花に一条の海漂へり

鱗雲

渡邊友七

吉弘恭子

冬日浴びヒメツルソバの淡き紅
冬景色俯瞰してゐる見舞客
朝ぼらけ額で止まる隙間風
ビル越しの富士朦朧と小春かな
茶の花のちりばめられし畝の丘
天を衝く朱き山門冬桜
一輪の山茶花凜と円壺かな

冬初め自律神経不調かな
猫にきき十一月に火を入れる
季語は冬磨き粉になる句集かな
長き夜やホットミルクを虫おさえ
不器用な二人しづかに冬に入る
みつめられ視線をはずす冬の月
我が影の伸びてちぢんで冬うらら

即身仏稻架ある寺に暮れてをり
蕎麦屋にてうまき栃餅出しにけり
ゐのこづち連れて帰りぬ旅ごろも
秋澄むや眞正面に夕陽落つ
炉開きや友と逢ふ日の定まりぬ
山茶花の咲くありホ口と散るもあり
じようびたきはやばやと来て季の移る

絵の中の半身の鮭も師走かな
足弱のための手摺がつめたくて
白い花大好きことにシクラメン
起き抜けの眼に水仙の花一輪
聖なる夜胎児のごとく眠りたり
白足袋の男の素性はかりかね
旧街道お大師さんへ冬うらら

山茶花のはらりはらはら
山茶花に甘き香のあり手折り知る
風水害葉付きの大根買うて来し
水もらひ紅のぞかせる固き菊
顔よせるほどけ始めた黄の小菊
枯芒体揺らして歩く母
てつぺんの熟柿夕陽を透かしをり

殻ぬちを過ぎゆく胡桃だけの時間
立冬のいつもの路地やけふも曲る
時雨来よ張三李四の軒々に
上履のまま出て山の眠りをり
神留守のけさも豆腐屋の早起き
窓を閉づ畳の上の枯葉かな
世の平安海鼠はふかく考へる

どんみりと雑木林の冬ぬくし
枯芦原の林の奥にはばたきす
蜘蛛の巣を逆光に見る十二月
落葉の上さらに黄色のグラデーション
鴨は鴨ハジロはハジロ陣動く
枯芝の本丸の跡江戸の空
どんぐりの鋒に芽冬ぬくし

猩猩の仕舞のをみな冬紅葉
子を産めぬ犬の乳房や冬ぬくし
綿虫を連れて鳥居を潜りけり
柿食うて疾くとか戻れ小熊達
寺町の梔子の実まだ淡く
冬桜ひと本寺の奥にかな
生垣の住まひの続く冬のばら

過去帳を繙く和尚小春かな
小鳥の様に落葉舞ひ降り定まりぬ
路地好きに連れのあるけり星月夜
色よきもみぢ一葉置いて文机
お日様が山に腰かけ刈田道
早ばやと熊手かついで家主くる
冬日和天明の銘手水鉢

島の牧大文字草そこかしこ
そよそよと八丈富士に芒かな
熔岩の岸壁にあり石露の花
哀しみを秘めたる島に秋惜しむ
孤島に立つ白き灯台石露の花
灯台や孤島に極楽蝶花咲く

島へ
須賀敏子

芝宮須磨子

あをぞらを見てゐる畦の捨案山子
唐松林冬日静かに落しつ
みのこづち悪さしたこと見破られ
新藁を人形のごと干し並べ
爽やかやジーパン堅く干し上がる
糲殻に渋柿しまひ冬に入る
降りしきる紅葉の林通り抜け

冬の空雀の声の光りかな
野良猫の声かけられし冬の星
クリスマス水面に映る鐘の色
早起は果してどなた落葉焚
車庫の中掃くも楽しき紅葉かな
冬の日に透きとほりたる薔薇の花

さざんかの云ふ方へ道曲りゆく
芭蕉てふかみしばゐ手に桃青忌
百の菊根元の葉より枯れゆける
白梟首で指図の懐手
冬の日を障子にもらひ茶笥供養
葉隠れの術見破らる富有柿
狐火よわが脳の中照らしあれ



東 亜 未

十二月作品より

森 理和・佐藤喜孝

母のゐて印度林檎は風邪の終

佐藤喜孝

懐かしい響きです。今は店先から消えた感があります。

今出回っている「ふじ」より大振り手で手にずしりと重量感があり肌はツルリと滑らかで、ところどころ薄い紅色もさした若草色がなにより美しく、甘い香りが蘇ります。バナナと並び林檎の中でも高級品だった頃がありました。確かに風邪の治り際などに、摩り下ろし一匙一口に運んでくれた母の温もりまでが思い出されます。(理和)

そば殻のこぼれてゐたる蒲団かな

竹内弘子

どんな頭の形の人にも合い、突起が心地良い刺激となる蕎麦殻の枕。どんなものでも無駄なく生活に活かした昔の人の知恵に感心させられます。起きたら布団に蕎麦殻が落ちていた、解れた所を探し直ぐに繕う。懐かしい生活の一齣を感じます。(理和)

美容液たたきをり火事遠ざかる

竹内弘子

一心不乱に顔に化粧水を叩くようにつけている。丁度折り悪く消防車のサイレンが近づいてきた。どうしようかと思いつつもやはり化粧を続けている。さいわいサイレンが遠退いて行く。散文化するとこれにもう少し尾ひれがつくだろう。日常の一シーンを切り取って、女性の強かさを(?)見事に描いている。「火事遠ざかる」は大胆な省略。(喜孝)

十二月八日忘れてしまひけり

堀内一郎

第二次世界大戦の開戦日を忘れてしまわれた。退院後の回復に専念して居られる作者の穏やかな息づかいを感じます。広島・長崎の惨状を引き起こした戦争を何故と、戦後生まれの私は疑問に思っていました。昨今の政治の動きに抗する事も出来ずただ歯痒いまま流されている現実、自由に物が言え行動も出来る今でこうなんだと思う時、人間の持つ業の深さに身震いを覚えます。(理和)

秋祭狸せんべい膨らみぬ 田中藤穂

この句に出合うまで狸せんべいの存在を忘れていました。薄い靴敷きの様な原型が熱した鉄板の上で表に裏にリズム良く木杓子で伸ばすように押さえるように撫でていると、みるみると膨らみ枯れ落ちた大きな朴葉の様な狸せんべいの出来上がり。飽きずに見いつた日が懐かしく思い出されます。(理和)

ゆつたりとした時間が流れている作品。(喜孝)

棗の実少女の拒否はガラス張り 東 亜 未

二階の窓から身を乗り出して棗の実を食べた記憶があります。小学生の頃でしたから新鮮な味として憶えています。この句の場合は味よりも姿・形ですね。直裁な少女の行動が微笑ましくさえ感じられます。(理和)

団栗や人は原始のままである 寺門 武 明

人間の本性は原始のままである。文明文化が進んでもなんら姿容はない、と達観している作者。喜んでいいのか、悲しんでいいのか。団栗は熊だけではなく古代人の

食べ物でもあった。(喜孝)

バナナ買って母を見送る北京駅 西本 春 水

母への慈しみが瑞々しく伝わってきます。バナナを抱きかかえる様に列車に乗るお母さんと見送る作者とが浮かんでいきます。(理和)

破れ蓮水を抜かれて立ちつくす 早崎 泰 江

蓮田の水が抜かれて地割れしている。枯れ折れたまま蓮は立っている。虫や小鳥が羽を休めたり、地中の虫が這い上がったり、きつと何かの役に立っている。(理和)

敗荷も水があるうちは様になるが、池の水がすっかり抜かれると「立ちつくす」しかない。作者は敗荷のすべてを見通しているようだ。(喜孝)

ファスナーの噛んではなさぬ夜の闇 吉弘 恭 子

新しい境地の句でしょうか。女性ならではの香りが漂います。(理和)

団栗を踏みつつ見廻猫の来る 赤座 典 子

猫の生態は良く分らないが、テリトリーを見廻る猫がいるのだらう。団栗を踏みつつとは野性味豊かな猫だ。猫をいきいきと描いている。(喜孝)

種なし柿小さな種を孕みをり 木村茂登子

種なし柿と称された柿の中に執念のような秕をみとがめた作者。「孕みをり」に柿と作者の距離が知れておもしろく読めた。(喜孝)

芋虫に召集令状来てしまふ 定槻じょう

さらりとした一句ですが、警鐘と読み、下腹に力が入り背筋を正される思いです。(理和)

少年の硝子の鼻梁冬に入る 篠田純子

大学受験のご子息をお持ちの作者が一心同体のごとく育む一方で、掲句のような少年の心のバランスを硝子の鼻梁と捉える冷静さを併せ持つておられる。(理和)

ささやかな谷中の寺の菊祭 芝 尚子

大きな谷中の墓地は有名ですが、谷中には小さな墓地

も数多くあります。隅々まで掃き清められた境内に十鉢たらずの菊展が開かれている。静かに穏やかに仏を守るお寺の佇まいに共感を覚えます。(理和)

臨江閣の昔の硝子秋夕日 芝宮須磨子

臨江閣は「群馬県の重要文化財。県や前橋市の迎賓館として明治17年に完成」とある。昔の硝子は平面を保てず凸凹しているので景色が歪んで見える。そこが又おもしろい。秋の夕日の中にもみる庭の景色も一段と趣があることだらう。(喜孝)

式部の実一葉の恋ままならぬ 鈴木多枝子

樋口一葉は紙幣に肖像画を使われ一種のブームになっている。一葉は女ながら家長として家族を支えなければならなかった。質屋通いをした一葉が紙幣に顔を使様されるとは皮肉なものだ。家長故か、いくつかの恋心も押し込めなければならなかった。まさに「ままならぬ」である。式部の実はすぐに紫式部を想起する。同じ女流ものかきとして一葉につながる。洒落た句である。(喜孝)

句

| | |
|-----------------|-------|
| 自轉車の芯まで濡るる秋の雨 | 佐藤喜孝 |
| 美容液たたきをり火事遠ざかる | 竹内弘子 |
| 信号は人間を堰く去年今年 | 堀内一郎 |
| 秋祭狸せんべい膨らみぬ | 田中藤穂 |
| 施餓鬼会の散華手元に散りきたる | 東亜未 |
| 団栗や人は原始のままである | 寺門文明 |
| 片付けもまだ残りゐて居待月 | 長崎桂子 |
| 夏休母者のもとに過ぎしけり | 西本春水 |
| 破れ蓮水を抜かれて立ちつくす | 早崎泰江 |
| 栃の実を一つ短き旅終る | 森山のり子 |
| 黄落や公衆電話硝子箱 | 森理和 |
| 腕ふかく夜半をまぜぬし石露の花 | 吉弘恭子 |



| | |
|----------------|-------|
| 十一月紙の重さを辞書とせり | 渡邊友七 |
| 団栗を踏みつ見廻猫の来る | 赤座典子 |
| 十月や誕生月のアップルパイ | 安部里子 |
| 雁渡し渡ったあとの一つ星 | 鎌倉喜久恵 |
| 種なし柿小さな種を孕みをり | 木村茂登子 |
| 金木犀挙動不審の人となり | 斉藤裕子 |
| 喜べばすつくと杉や星づく夜 | 定梶じょう |
| 声明のつむりのひかり黄菊かな | 篠田純子 |
| 大振の湯呑の葛湯小夜嵐 | 芝尚子 |
| 臨江閣の昔のガラス秋夕日 | 芝宮須磨子 |
| 山栗のそのちいさきを好みけり | 須賀敏子 |
| 式部の実一葉の恋ままならぬ | 鈴木多枝子 |

喜孝抄



漢訳蕪村

(冬の句)

王 岩

寒菊花朶々

日照村落邊

沙頭水鳥動

濡脛戯白波

層々浪打来

水鳥横歩走

双手輕撫桐火盆

恰似撫彼無弦琴

寒菊や日の照る村の片ほとり

磯ちどり足をぬらして遊びけり

参考：1 白鷺下秋水、孤飛如隊霜。

心閑且未去、独立沙洲傍。

李白・「白鷺」

2 江南緑水多、顧影逗輕波。

終日奏雲裏、山高奈若何。

李嘉祐・「白鷺」

打よする浪や千鳥の横ありき

桐火桶無絃の琴の撫ごころ

参考：1 「淵明不解音律、而蓄無弦琴一張、每酒適、輒撫弄

以寄其意。」

梁昭明太子・「陶靖節傳」

2 靜中有物即聲心、

物象相忘趣轉深。



輕撫桐火盆
可有琴心在

黃昏要塞閉閑時
又成大雪落紛々

為報柴桑陶處士
無絃爭似更無琴。

申屠致遠・「無絃琴」

3 道士琴邊酒一壺
壺中酒盡典琴沽
醉來高出淵明上
不特無絃琴亦無

范叔範・「醉道士彈琴」

4 一片焦桐古色沈
高山流水銷遺音
月臨石榻風塵度
花覆金微塵不侵
幽賞誰知陶潛趣
希声自契伯牙心
十纖撫罷夜堂靜
斷霧飛鴻何處尋。

伊藤長胤・「無絃琴」

琴心もありやと撫る桐火桶

大雪となりけり閑の戸さし頃

特別作品

鷹野

篠田 純子

美しく腹を減らせる鷹野かな

鷹匠に据ゑられしより屹度視る

鷹匠の眼光既に野性なり

隼に追はる白鳩生き延びよ



しくじりし隼群る鴉かな

餌合子を叩けど隼拗ねにけり

樹上より凜と鷹野を見くだしぬ

隼のスイッチ変はる急降下

一瞬のひしやげたひかり鷹野かな

鷹狩は女を嫌ふ南無阿弥陀



あをかき集

冬はじめ
返り花
雪虫

竹内弘子 選



ゆふべみた夕焼いろや返り花
五日ほど微熱のなかに雪ばんば
雪螢落し紙から舞ひたつや
雪螢父のうしろについて母
忘れ花戦火の報もいつか慣る

吉弘恭子

酔のものの酔の匂ひ立つ冬はじめ
綿虫の追へば逃げゆく薄日中
軒へ来てぺたぺたと死に雪螢
耳元へ生死は夢と雪螢
返り花黄の一輪に人寄れり
魂の渴き止まらず返り花
綿虫や母は帰郷を果せず
手品師の指のもつれや冬はじめ
金の帯きりり銀座の冬はじめ
私生児と書かれし戸籍返り花
あやつらるごとく家出て冬初め
初冬や沈めしままの鍋茶碗
吹き晴るる空の嗚咽か返り花
借景の影の部分の綿虫よ
野仏の顔の丸みや返り花
綿虫に気を留める人とめぬ人
冬はじめさつと焙りて海苔の青

田中藤穂

篠田純子

渡邊友七

芝 尚子

ひとり言多くなりたる冬初め
返り花八十路の憎まれ口いよよ

能「斑女」

恋に狂ふあそび女あはれ返り花
遅れじと水尾の躑ぎゆく冬初め

定梶じょう

遠の木の返り咲くとふ日々眺む
巡回の巡查がはたく雪螢

冬初めブーゲンビリアの咲く島へ
黴臭い博物館に返り花

須賀敏子

木の瘤を見に来てありぬ返り花
初冬の日一別来のごと額に

綿虫や解かれし糸をぶつり截つ
初冬や一尺残して凌霄花

森理和

水飲みに起きて初冬の畳ふむ
ガラス戸に露もつ朝冬初め

鎌倉喜久恵

白いもの一つともりて返り花
ここかしこ異常気象の返り花

返り花鉄路を潜り鳥居あり
初冬や鯉に届かぬ鯉の餌

東亜未

綿虫や日残る空にまぎれ入る
綿虫や追分の歌が一節

寺門文明

蒲公英の両手で包まれ返り花
綿虫や身体鍛錬太極拳

寺屋根に鳩の賑はひ冬はじめ
雪蛭神のあそびを見て倦かず

薄色の箱根空木の返り花
犬選ぶ散歩の道に返り花

薄色の箱根空木の返り花
犬選ぶ散歩の道に返り花

佐藤喜孝

かんばせも風も初冬の水の面に
雪螢宇宙の果てのことをふと
初冬の天に胸張る太郎杉
自転車は将棋倒しに日向ぼこ
たとふれば失意泰然花八つ手

堀内一郎

冬始めシャツの釦をつけておく
大手門辺り桜の返り花

竹内弘子

綿虫や潜り戸にある弾の痕
初冬や土蔵の中の珈琲店

選のあとに



五日ほど微熱のなかに雪ばんば

吉弘恭子

ゆふべみた夕焼いろや返り花

雪螢落し紙から舞ひたつや

2月×切
春待つ
凍る
いぬぶぐり

3月×切
きさらぎ
春雷
蛭

兼題「綿虫」のほか「大綿」「雪螢」「白粉婆（しろこばば）」「雪ばんば」ともいう。二ミリほどの虫で体から白い蠟質物を分泌するのでこの名がある。「微熱」、俳句を作る上でクセのある言葉がうまく使われている。現実には体調を崩した鬱陶しい立居のなかの想念だと思いが、「雪ばんば」によって、より詩情あふれる作品となった。次句、中七までの平明な言葉の使いかたがよい。易しい言葉で人の心にとどく作り方の好例と思う。三句目も「落し紙」を詩に昇華させた「ひらめき」を感じます。

軒へ来て。べたと死に雪螢

田中藤穂

耳元へ生死はゆめと雪螢

あやつらるごとく家出て冬初め

渡邊友七

以前、安曇野を旅された折、うす青い光の雲のような「雪螢」の群れに遭遇された由。

「べたべたと死に」がすごい。分泌液をまとった雪虫の生態から、あつけない人の死が思われる。雪のように舞いとび、人家の戸口や衣服に付着して死ぬそうです。次句はやや観念的ですが、作者の死生観というか余裕がうかがえます。その場の不思議な光景の中でうまれた一句だと思えます。

手品師の指のもつれや冬はじめ

篠田純子

「手品」は『今昔物語集』に遡る古い言葉のようです。『手なみ』『手のふり』などから、手先でする雑芸となり、人前で見せるのが「手品師」。「鳩がとびたつ公園の／＼公孫樹は手品師老いたピエロ…」という歌があった。

手先の芸だから「指のもつれ」は見ていてつらい。「手品師」という言葉に哀感があるのかもしてませんが「冬はじめ」があっさり決ったと思います。

「あやつらる」、本人の意思に反して操作されているような行動をしたのかとびつくりするが、本当のところは、気が急いで殆ど無意識の出掛ける支度をして「家」を出たのではないかと思う。面白い言い廻しだと思いました。動作が緩慢になるのに反比例して気が急ぐのは私も同じです。

冬はじめさつと焙りて海苔の青

芝 尚子

春先に採れる「青」のまざった「海苔」を「焙」と、良い香りが立ち上る。これに鯉節の搔いたのとよく漬かったぬかみそがあれば何もいらぬ、と母が言い言いしていたのを思い出す。重くれたところの全くない、歯切れの良い東京っ子の俳句と思えました。

綿虫や日残る空にまぎれ入る

鎌倉喜久恵

曇った日の夕がた。綿屑のように浮遊している白い小さい生きものは、夕闇が迫るにつれて青みを帯びてくる

という。「日残る空」がうまいと思いました。

巡回の巡査がはたく雪螢

定梶じょう

「お巡りさん」と親しみをこめて呼んだくらい、子供の頃は、自転車に乗った「巡査」が戸別に回っていたような気がする。いつの頃からか、街で自転車に乗った「巡査」を見かけなくなつた。戸口で制服に付いた「雪螢」を「はたく」。やつぱり古い映画の一面面のような。どれも身辺の些事を易々と、過不足なく詠んでいるようにみえる伎倆を感じる。

綿虫や追分の歌が一節

寺門文明

初冬や水に入る手ぐづぐづし

蒲公英の両手で包まれ帰り花

はじめ字が足らぬようにみえて何度か読み返したら、五五七にできているのだ。「歌が一節」は「歌の一節」としたほうが伸びやかな「追分」の気分がでるようになっています。次句、「手」が作者の意志に係りなく、ひとり「ぐづぐづ」しているようで面白い。三句目、「蒲公英

英を両手に包み」としたほうがすっきりします。

祖母の着し紬解くやしろばんば

須賀敏子

手元にあるかぎりの歳時記に例句がなかったが、井上靖の自伝的小説《しろばんば》を思いだす。転勤の多い両親の許を離れて、曾祖父の妻だったお婆さんと一緒にくらす少年のあけくれが、大正の始め頃の伊豆湯ヶ島の風物とともに鮮やかに描かれた長編である。

初冬の夕方、子供たちが「しろばんば」と口々に叫びながら、小枝を振り廻したり素手で掴もうと飛び上がったりして遊んだらしい。「しろばんば」は「白い老婆」だと思つたので、「祖母」ではなく「紬」の落着いた色合いが出るとずっとよくなると思います。

初冬や岩と化したる海鵜二羽

森理和

返り花鉄路を潜り鳥居あり

川鵜は激減して「海鵜」が北海道から九州までの沿岸に繁殖している由。鵜飼に使われるのも海鵜。上野公園能など、コンクリートの尖った「岩」に文字どおり黒山

になっっているが、常に東京湾を行ったり来たりしている
そうだ。鶺鴒が魚を、鷹が小鳥をさがすさまになぞらえて
「鶺鴒の目鷹の目」というらしい。

次句、思いがけぬ所に鳥居があり、「返り花」が咲い
ていた。何の花か、一つの出会い。

声明と鬘鬘怒濤冬はじめ

東 亜 未

「鬘鬘怒濤」、口に出して言う言葉の強いリズム感が素
晴しい。「声明」と音がぶつかるところが却っていい。
身の引き締まる感じ。

「犬選ぶ散歩の道に返り花」の「犬選ぶ」は、「犬の選ぶ」
だと思ふ。原句だと犬を選ぶという意にとれますので。

目的はなにと綿虫潜りけり

早崎泰江

「目的はなに」と、問ひかけるような、「綿虫」の不意
の出現に心をうばわれたような幻想的な雰囲気がある。
あとの「綿虫」につながる感じがいい。

立退きのくづれし花壇返り花

斉藤裕子

「立退き」は熟語ですが「立退きの」だと不熟にみえ
るので、「立退きて」とすると一句の調子がととのうと
思いました。手入れのされない「花壇」の侘しき、言わ
んかたなし。

綿虫のヒマラヤ杉の下に逢ふ

安部里子

「綿虫の」は、綿虫がとんでいるところの“で”ですが、
いっそ「や」と切ったほうがよいのです。ロマンティッ
クな風景が浮かんできます。

初冬の竹藪みどりいきいきと

長崎桂子

「竹の秋（春）」「竹の春（秋）」で、この季節は葉の緑
が「いきいき」しています。「綿虫の急に増え飛ぶ日暮時」
の「日暮」は、日の暮れようとする「時」ですから、こ
の句の場合「日暮かな」とすると余情がでるように思
います。

山里の姉の家へと綿虫が

芝宮須磨子

「押入れに一日出し入れ冬初め」は「押入れ」と「出し入れ」が重なるので、仮に「押入れの一日しごと冬初め」とするのも一案です。「父祖の地へ久に詣りて返り花」も別の兼題「雪螢」のほうがしつくりするかもしれない。

綿虫を払ひつ潜る薬医門

森山のり子

「綿虫」について、そういえばあれが綿虫だったという認識しかなないので、たいそうなことは言えませんが、掲句、何かひっそりした佇まいの名医と言った感じがあります。

初冬の砂場に石の積まれおて

赤座典子

どれも骨格のととのった佳句なので、句数の少ないのが残念です。「初冬の」なんでもないような一句に惹かれました。

言ひたきことまだひとつあり返り花

鈴木多枝子

季重なりを不可とするわけではありませんが、「初冬の白息にしてゆたかかな」の「初冬」「白息」はどうでしょうか。「返り花」の句は面白いと思いました。



十月の竹内弘子

- | | | | |
|---|----------------|----|-----------------|
| 1 | そのあした木犀に戸を叩かれし | 8 | 洋梨はみどりに実りいなびかり |
| 2 | 金木犀ちさき子どもの感嘆詞 | 9 | みちのくの台風カーブせる辺り |
| 3 | 木犀やどつと馳けだす塾がへり | 10 | 黄花コスモス駅に弁当つかふ人 |
| 4 | 宗匠の裏の空地の赤まんま | 11 | 無人ホーム足下に濃き松葉菊 |
| 5 | 日蝕や銀杏の実は落ち尽し | 12 | そちこちに蟋蟀の跳ねる茂吉の碑 |
| 6 | 校庭に子どもの見えぬ秋の雲 | 13 | 茂吉館へ上る砂利道踏むさやけさ |
| 7 | 洋梨を紗幕に蔽ふいなびかり | 14 | 茂吉館しづまりかへり昼の虫 |
| | | 15 | 祖父に似し白き顎髭ななかまど |

- 16 山の端に炊煙あをし晩稻刈
- 17 倒伏田ゴツホの金の照りうねり
- 18 蓑を被た奴すがたの藁ぼつち
- 19 秋の川光り窓外暮れやすし
- 20 柿あかき茂吉の里を後にせり
- 21 渋柿に焼酎吹いて口ほめく
- 22 大風を恠へし百匁柿の数
- 23 梢ちかき熟柿に小鳥来てをりぬ
- 24 柿の蒂に小鳥の柔毛つきやすし
- 25 台風の逸れし柘榴の重さかな
- 26 柘榴の実と見かう見して描きあへず
- 27 真田氏のいてふ黄葉に日が当る
- 28 長雨や地鳴りのやうな雷に覚め
- 29 秋霖や逗子よりの便ぬれて着く
- 30 母よ二十一年目の橐吾咲けり
- 31 蟪蛄の三角貌を激写せり

水瓶座

田中藤穂著

を読む I

東 亜 未



田中藤穂著「水瓶座」は昭和五十五年から平成十一年まで、著者五十三才から七十二才までの二十年間の六〇〇句から成っている。平成十二年の著書の誕生日に発行されている人生の足跡とも云える一冊である。あとがきにその思いが綴られている。「私にとって俳句は自分を勵ます喇叭のようなものでした。俳句に出遇わなかつたら私の後半生はどうなっていたでしょうと、しみじみ俳句に感謝しております。」という。この句集には家族に対する思い、こまやかな感情愛情が溢れている。「あを」代表は、二〇〇一年一月発行の第一号後記に「俳句を生活の芸術化の一助に人生の同行者として大切に……。」と書いておられる。この一年間に先輩の俳句から学びたく、御指導いただきたいと思ひ誌上鑑賞をさせていただくことになりました。

わが指針いつも父指す鯉起

平成九年

鯉起という季語を歳時記で見る。「日本海沿岸で鯉が獲れる冬季に鳴る雷。漁師達はこの雷が鯉を起こして岸に寄せるといい、初漁・豊漁の前兆とする」とある。

人として女性として主婦であること妻、嫁、母としてやがて姑になる女の一生の最も厳しい時期のいわば嵐の中で、北極星のような指針が、いつも父指すと気づいた時の句であると感じる。

この句集の中で父を詠んでいるところを年代順に取りあげてみると、父上に対する思いが、変化していき、やがて鯉起になる道がみえてくる。

遠蛙父の掌薄くなりしかな

昭和五十六年

釈迦苦行末期の父に似て寒し

昭和五十九年

死の報せ帰天と書かれ花水木

昭和五十九年

遠くに居て父上のご苦労や老いていくことを思いやり、

末期には釈迦苦行像に譬える程。労ることすらできぬつらさを耐えている。そしてご帰天。それは看取られた方からの知らせであろうか。

〇脚を父より継げり遠蛙

昭和五十九年

父の日よ反骨をみな子が継げり

昭和六十二年

風の夜のはしばみを噛み父を恋ふ

昭和六十四年

父親と自分の繋がりはやはり遠蛙程であろうか、いやいや反骨の精神は子が皆受継いでいるぞ。そして、年経るにつれて父親への慕情がつのりくる。榛^{はしばみ}への思いは何であろうか。心にもすこし余裕ができてきている頃であろうか。

公孫樹の芽父の母校に合格す

平成五年

わが父も疎林もすがと枯れし

平成八年

お孫さんが父上の母校に合格されたのではと想像する一句。心の中で亡き父上への思いは、次第に昇華されて、父上との距離が確かになり、風の通う道のようなものが出てきた感じがする。

虫の夜や父そっくりの兄の声

平成八年

父そっくりの兄の声によって父が心の中に甦り、年を越しての正月、しみじみと、そして強く父親のことを考えたのであろうか。

「わが指針いつも父指す鯉起」この句に触れて私は身が震えた。父に気づかれたのだ。いたわりの心、恋しさ、〇脚、反骨それらの根つこの処に、いつも父との愛がある。今まで、ずっと父の愛の中に居てこそやってこられたのだと気づいたときの感動。雷のように気づいたことによつて著者の心に潮のように満たされるものが押しよせ豊かになっていく。

自分の父親に「父」をしつかり感じ、指針とできることは幸いである。得がたいとすら思う。それは自分の人生をもしつかり受けとめることができたことである。

アルバムやカンカン帽の父に抱かれ

平成十一年

カンカン帽の素敵な御父上の膝の感覚がよみがえる句。はじめて「水瓶座」を手にして父上への思いに羨望を覚え今回のテーマとしました。

回



田中 藤穂

鳴十一月号鑑賞

主宰 伊藤白潮

創刊 昭和23年



鳴十一月号を拝読、ピチピチと元気のよい句が全誌に溢れていて圧倒されました。

主宰の伊藤白潮氏は「日過亭風信」の中に喜寿を過ぎたという一節があり、私も同年代、そのせいか主宰の

いくさにも恋にも死なず種を採る

の一句にはいたく共感いたしました。戦争中は東京にい

た私達でさえ日々生命の危険にさらされていたのですが、男の方で外地へ出征された方などは、いくさにも死なずという感慨はどんなにか深いことでしょう。

一方、恋は戦争と違って個人的なこと、とは言え人生の重大事、生死を賭けるような真剣な恋をなさったのか、いくさと並べた大仰な読みぶりが、諧謔か本気か判じがたいが、ともあれその恋にも死なず今種を採っていて、春が来たら土に播くつもりなのでしょう。生命の再生、連続です。重いテーマを重層的に重ねながら、ふつと可笑しみもあり、淋しさもあり、どうしようもない大きな力の中で生きている人間の姿が詠まれています。

儂いようで案外シブトイ人間の生命、過去現在未来にわたる長い時間を凝縮された、会心の一句ではないかと拝読いたしました。

次は十一月集の中から

敷居まで草の風くる魂送

井上 信子

仏壇にお線香を上げこれから送り火を焚くところでしょうか。庭の草の上を渡るかすかな風が敷居まで入ってきて、亡き人の魂をまた彼岸へ帰す静かな淋しさが感じられます。

雲が雲ぬき去るくらさ葉鶏頭

荒井 和昭

この雲は雨をはらんだ灰色の雲なのでしょう。溢れ出すように多彩な色を抜けている葉鶏頭は、陽を浴びれば絢爛と、陰れば急に様相を変えて様々な姿を見せます。上五中七で雲と葉鶏頭の変化とスピード感を巧に出していると思います。

からつぽのバスに灯る秋はじめ

高橋 道子

都会ならば、これから家路へ向う人達を乗せる夕暮の始発バス、田舎ならばマイカーの普及で乗る人もまばらな路線バス、どちらにしてもバスの巨体がからつぽで、それに初秋の灯がぽつと灯つたら不思議な空虚感が漂うでしょう。その一瞬をとらえた佳句です。

秋草に置きしマッチと線香箱

小林 正史

先日身内の法事で周防高森という所へ行きました。雪舟作の庭がある広いお寺でしたが墓地は裏山で、まさにこの句のとおり……………。

こんな素直に、これだけいって情景も雰囲気も全部わかってしまう。俳句とは素晴らしいとつくづく感じ入りま

した。

立秋の言葉正しく使ひけり

木村みかん

二十四節気の中で私は立春と立秋が特に好きである。昔の人はえらいといつも感心するのは、青松虫やこおろぎが立秋にきちんと鳴き始める。暑さはまだまだ衰えなけれど夜風がほんのわずか秋を感じさせる。熱い熱いとだらけていたのが、暦の上だけでも今日から秋と思うと身のどこかがピンとして、言葉も正しく使う気持になる。季節と人との微妙な関係を鋭くとらえている。

裏口へ小椅子を二つ遠花火

数長 藤代

風の通る裏口へ小椅子を二つ出して涼んだのだろうか。そしたらたまたま遠花火が見えたのか。それとも遠花火が見える裏口へ椅子を二つ並べて花火を見たのだろうか。日常の中のさりげない出来事、並んで掛けた二人は気の合った初老の御夫婦、そう思わせる穏やかな雰囲気がこの句にはある。

人間のいとなみが限りなく懐かしく思われるそんな句である。

十一月の句会

傳句会

9日

カフェ傳

長き夜やホットミルクのむ虫おさえ
 行く人のかほ浮く釣瓶落しかな
 渡り鳥鯉に届かぬ鯉の餌
 白転車の芯まで濡るる秋の雨
 山茶花ははらりはらはら掃くうへに
 マリア像買はずに秋の津和野かな
 冬銀河紐の切れ目はおそろしき
 樹の瘤に触れて別れる秋の暮
 冬日浴びヒメツルソバの淡き紅
 ほとほととたまる闇からせせり蝶
 忘れぬ極楽鳥花の鳥は秋
 路地好きに道連れありて早月夜
 蠅螂の三角顔を激写せり
 水琴窟のやうな水漏れ冬に入る
 秋樹の瘤に触れて別れる秋の暮
 じょうびたきははやときて季の移る
 白転車の芯まで濡るる秋の雨
 渡り鳥道につなげて家建てる
 路地好きに道連れありて早月夜
 渡り鳥鯉に届かぬ鯉の餌
 蠅螂の三角顔を激写せり
 マリア像買はずに秋の津和野かな
 よほどころなくてまつつく秋の蝶

里子 綾子 理和 喜孝 裕子 藤穂 木枯 寒林 典子 恭子 敏子 須磨子 弘子 喜久恵 寒林 喜久恵 八田木枯選 須磨子 弘子 喜孝 理和 藤穂 綾子

樹の瘤に触れて別れる秋の暮
 長き夜やホットミルクのむ虫おさえ
 職なき子無口のままにさんま食ふ
 水琴窟のやうな水漏れ冬に入る
 忘れぬ極楽鳥花の鳥は秋
 ずっしりと中華まんじゅう冬に入る

竹内弘子選 寒林 里子 喜久恵 綾子 敏子

調句会

21日

さいたま市岸町公民館

冬されの今は真紅に櫻の根
 熊の仔に木の実がたんとおちてゐる
 秋の木根かたに影を置いて来し
 MRI頭部診断八ツ手咲く

喜孝 弘子 藤穂 綾子

七座句会

23日

明德稲荷

雪の重き雪のつめたさ林檎もつ
 ささんかの差す方向へ道曲る
 綿虫を連れて烏居を潜りけり
 不器用な二人静かに冬に入る
 白波に白波寄する冬銀河
 まろびてはとがりては日の枯芒
 甘えることでず北の子冬の蝶
 から松林冬日しつかに通りけり
 綿虫や母は帰郷を果たせず
 竹林の冬日は斜め水の音
 過去帳を和尚繙く小春かな

喜孝 東亜未 尚子 里子 理和 恭子 丈明 多枝子 純子 夏子 須磨子 八田木枯選

綿虫やブライドこっそり失ひし
 まろびてはとがりては日の枯芒
 雪来るか十林寺村出て久し
 どんみりと雑木林の冬ぬくし
 綿虫や母は帰郷を果たせず
 綿虫を連れて烏居を潜りけり
 白波に白波寄する冬銀河
 歩騎の一手打つまで長し麩吾の花
 ひかりこぼして玉堂の銀杏散る
 碧空を仰ぎて畦に捨茶山子
 林麓に遠雷吃りどもり来し
 母のゐて印度林檎は風邪の終
 竹林にはや六人が葉喰
 蜘蛛の囲を冬日に当つるさかしまに

里子 恭子 喜孝 純子 尚子 理和 夏子 多枝子 恭子 喜孝 純子 尚子 理和 夏子 多枝子 恭子

大山夏子選

佐藤喜孝選

綿虫や母は帰郷を果たせず
 小鳥の様に落葉舞降り定まりぬ
 白波に白波寄する冬銀河
 小春日や取つて取られて玉と玉
 綿虫を連れて烏居を潜りけり
 不器用な二人静かに冬に入る
 晩年へ雑木林の落葉して
 白波に白波寄する冬銀河
 二分たきとまたひとつありかほちや食ふ
 淡々と三日月浮かぶ山毛櫨林

純子 理和 須磨子 尚子 里子 夏子 多枝子 恭子

露 天 浴 池 在 野 外
Lù tiān yù chí zài yě wài

疊 翠 群 山 撲 面 來
Dié cuì qún shān pū miàn lái



「浴池」とは「風呂」のこと。

「群山」とは「山々」の漢訳。

王 岩（漢訳も）

緑さす山々せまり露天風呂

芝宮須磨子



西年を迎えた。西年とはどういう年なのだろうか。12前はどんな世の中だったのだろうか？01～01 12カ国3億五千万人のEC統合市場が発足する。*01～19皇室会議が開かれ、皇太子妃として小和田雅子を正式に決定する。*01～21板橋区の石神井川で、背中に洋弓の矢が刺さったオナガガモのメスが発見される。*04～21新体操の山崎浩子が統一教会からの脱会を宣言する。*05～15日本初のプロサッカリーグ、Jリーグが開幕する。*12～11宮内庁が、失声症になっていた美智子皇后が回復したことを発表する。*12～16田中角栄元首相が、入院先の慶應義塾大病院で、甲状腺機能亢進症に肺炎を併発して没。あわただしく一年をふりかえると、昨日のような鮮明な出来事である。今世情を賑わしている北朝鮮による拉致問題はまだ騒がれていなかった。お先真つ暗なことしか思いつかないが、一番底辺から出発する今年のおわりにはいい年だったなあと思うことだろう。



写真真を読む、が終わった。24回にも渡り書いていたいただき感謝である。今年には田中藤穂著「水瓶座」を東亜未さんに書いていただく。一回目から出足好調である。次回はどういうテーマで書かれるのか私も楽しみ。今年は他の方にも句集を出していただきたい。そういうお手伝いをしたいと計画している。中島浩子先生には一年間お世話になりました。料紙をいろいろ選んで頂いたり、横書きに挑戦したり、拝見する者をおおいに楽しませていただきました。今年はずこしかわった趣向で夏目明彦先生に俳句からイメージした絵を描いていただいた。無理なお願いをお聞

き届けいただき感謝しています。これから一年おたのしみ下さい。先生の略歴は68年木曾に生まれる。94年愛知県立芸術大学日本画科卒。96年同大学院修了。現在慶應義塾中等部勤務。今まで表紙は私がたのしんでいたが、今年は奥田久子さんの写真をお借りすることが出来た。私のようにデジカメでスナップ写真と違い一眼レフとフィルムという本格派の写真である。ご両人ともコンピュータで複数受賞しておられる。原作を少しでも損なわないよう印刷しなければと肝に銘じている。しばらく中断していた「のぞきめがね」を再開しました。田中藤穂さんの筆から現れる俳句の世界は何時も目から鱗が落ちるおもいです。全て乞ひ期待。

ご寄付深謝

大山夏子様 芝苕子様 森理和様

二〇〇五年一月号

発行日

二〇〇五年一月二〇日

発行所

東京都中野区中央2-50-3

電話

090-9828-4244

印刷・製本・レイアウト

佐藤喜孝

カット／赤座吉保・恩田秋夫・松村美智子

表紙／奥田久子

会費 一〇〇〇〇円(送料共)／一年

郵便振替 00130-6-55526(あを発行所)

乱丁・落丁お取替えしませぬ。